

地元木材使い新しいオフィス提案

岡山県立大の学生と検討

建設業界で働き方改革が叫ばれる中、働きやすい執務空間づくりに取り組み建設会社が増えている。岡山市北区に本社を置くまつもとコーポレーション（北川克弘社長）は、本社フロアにフリーアドレスを導入するとともに、フロア中央に役員デスクを配置し、コミュニケーションが図られる空間を創出した。設計部フロアでは岡山県立大学と共



同で、地元木材を使った新しいオフィスの形を提案。動線を邪魔しない手作り木工家具などを導入し、効率性と温かみのある空間を作り出した。

同社は塩飽大工の流れをくむ総合建設会社。創業は1915年で、社員数は現在約90人。国宝の吉備津神社を同表町に移転した。これをきっかけに働き方改革を加速。執務空間の見直しもその一環となる。

北川社長は「社員の高齢化が進み、若い人に入社してももらわないと、今後施工能力を失っていくのではないかとという危機感があった。優秀な若い人に入社し



地元岡山県産の木材を使った設計部フロアの
前で説明する北川社長

てもう一つには、仕事と私生活が両立しやすい都市部への移転が良いと考え本社を移した」と移転当時を振り返る。

◇◇◇

執務空間の改修を始めたのは3年前。ちょうどコロ

ナ禍で在宅勤務などが増えたことを受け、どこでも快適に仕事ができる空間づくりを始めた。まず風通しの良い組織を目指し、フロアの中央に役員デスクを配置。その後、営業や工事・施工、管理など各部署単位で順次フリーアドレスを導入した。同時にトイレや休憩スペース、会議室の改築なども行い、快適な職場環境づくりに力を入れた。

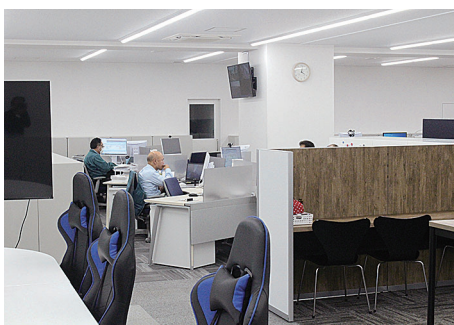
昨年11月には、改修が進んでいなかった設計部のフロア工事に着手。設計部は仕事柄、フリーアドレスがなじみにくいため、岡山県立大学の畠和宏研究室と共同で、地元岡山県産の木材を活用した新しい執務空間を検討。学生と同社設計部の社員が「どつすれば働きやすく、快適な執務空間が

作れるのか何度も議論し、一つずつ形にしていた」（北川社長）。

設計部に配置された机やデスクワゴン、書棚、間仕切りなどは学生と社員が地元産の木材を活用して手作りで作した。主に使用した木材は3枚×9枚の誰でも手に入る安価で一般的に流通している材料。こうした普遍的な材料でオリジナルな空間を作り出した。北川社長は「特別なものではなく、安価な地元産の木材を活用することで、環境負荷低減などSDGs（持続可能な開発目標）にも役立つのではないかと」という。

◇◇◇

同社は執務空間の改修に合わせ、全社員にノートパソコンやモバイル端末も支給。最近では健康管理の一環として、希望者にスマートウォッチも提供している。



役員デスクはフロア中央に配置され、風通しの良い組織に

北川社長は「社員の平均年齢は16年に48歳だったが、今は41歳まで下がった。こうした取り組みを通じて、若い人が入社してくれて、お客さまにたおかげです。お客さまに満足してもらえる建築物や構造物を提供するには、社員が自分の仕事にやりがいや誇りを持っていないとできない。そのためには社員のエンゲージメントの向上に今後も取り組んでいきたい」という。

同社は執務空間の改修に合わせ、全社員にノートパソコンやモバイル端末も支給。最近では健康管理の一環として、希望者にスマートウォッチも提供している。

